



京大広報

No. 672

2011.11



京都大学東京フォーラム
—関連記事 本文3526ページ—

目次

全学の情報環境の構築を目指して 副理事・情報環境機構長 美濃 導彦	3524
〈大学の動き〉 京都大学東京フォーラムを開催	3526
〈部局の動き〉 経営管理大学院が建国大学経営学研究科および 同大学商科経済学院と教育学術交流協定を 締結	3527
生存圏研究所赤道大気レーダー10周年 記念行事を開催	3528
〈寸言〉 「人と同じことをしない」 益本 康男	3529
〈随想〉 断想：左と右 名誉教授 左右田健次	3530
〈洛書〉 心の健康と体の健康 松田 文彦	3531

〈話題〉 東日本大震災関係シンポジウム「大震災後の 医療・診療・感染症防止を考える」を開催	3532
ブータン上院議院ベンジヨール議長一行との 懇談会を開催	3532
森林科学公開講座「森と樹木から世界を観る」 を開催	3533
京都大学シンポジウムシリーズ「大震災後 を考える」シリーズ XV「東日本大震災 地域事業継続に向けて」を開催	3533
教育学研究科附属臨床教育実践研究センター 公開講座「うつの心理療法：『はかなさ』と 『型』の国日本において」を開催	3534
〈訃報〉	3534

全学の情報環境の構築を目指して

副理事・情報環境機構長 美濃 導彦

情報環境機構は「教育・研究，学生支援，学術情報および知的財産の蓄積と活用，地域社会から国際社会までを視野に入れた広汎な社会貢献，さらには機能的な組織運営といった大学におけるあらゆる活動を支えるために必要な高い安全性，利便性を備えた先端的な情報環境を構築，運営すること」を目的として2005年4月1日に設立された。2011年度より，機構長はCIO(Chief Information Officer(最高情報責任者))に指名され，大学全体の情報環境を大学の経営戦略に従って構築する体制となり，IT企画室を設置し，ここに業務を中心に行う教員とIT専門職員(中間職)が配置された。機構は組織的にはIT企画室に加えて事務本部情報部に属する事務職員，技術職員から構成される組織となり，学術情報メディアセンターに所属する教員(業務支援を義務とする)と共に全学的な情報環境の企画，構築，運営，管理を行っている。

大学の主な使命は，教育，研究，社会貢献であり，これらの活動を支援していくのが大学の情報環境である。この視点で，現在の情報環境を眺めてみると大きな問題がある。情報環境機構の守備範囲は教育研究のための情報環境のみであり，大学の管理運営のための情報環境は，本部では部署ごとに，部局は独自に事務系のシステムを構築している。このため，データ共有ができず，効率的な事務処理が行われているとは言えない。また，機構が構築する教育用の情報環境と事務が構築している情報環境も独立しており，効率的なデータの受け渡しできていないのが現状である。そこで，総長はじめ理事の協力のもと，情報環境機構の守備範囲を大学の管理運営のための情報環境を含む大学全体の情報環境の構築，維持，管理までに広げ，大学全体として情報環境を最適化していく方針を立て，今後は活動を強化していく予定である。

本稿では情報環境機構が行っている活動について紹介し，大学の構成員の皆さんが大学の情報環境について考えるきっかけとなるように，大学の情報環境を，1. ネットワークを中心とする情報基盤，2. スパコンを中心



とする研究情報環境，3. PC端末室やOSLを中心とする教育情報環境，4. 管理運営を行う事務系情報環境に便宜上分類して説明していくが，これらは相互に関連していることに注意していただきたい。

1. 情報基盤

情報基盤としての機構の重要な活動はKUINS，認証サービス，情報セキュリティ対策である。KUINSは，利便性と安全性を備えたネットワーク環境の構築を目指している。利便性と安全性はトレードオフの関係にあり，先進的なユーザにはご不便をおかけしているが，大学としての情報セキュリティ対策は必須であることをご理解いただきたい。本学には年間60件程度の情報セキュリティ対策が必要な事例(外部からの攻撃や不正侵入，全学情報システム利用規則に違反したP2Pファイル転送の利用など)があり，情報セキュリティ対策室で検知したのち管理者に通知し対策をお願いするという体制をとっている。このために部局に情報セキュリティポリシーと情報セキュリティ実施手順の策定をお願いしているだけでなく，全構成員を対象として情報セキュリティに関する基礎知識を学んでいただくためのe-Learningを実施している。統合認証サービスは，大学の構成員が一つのIDとパスワードで学内のいろいろなサービスを利用できるようにする仕組みであり，これを利用すればサービスごとにIDを発行する必要がなくなる。学内でのサービスをすべてこのシステムに接続することで利便性が高まる。学内の重要な情報にアクセスするにはIDとパスワードだけではなく，ICカードを用いた認証を併用することにより，利便性を保ったまま情報セキュリティを確保する方式を導入する予定である。統合認証システムは，学内からのアクセスだけでなく学外からも大学が提供する各種の情報サービスにアクセスするためにも利用されている。

2. 研究情報環境

研究情報環境として学術情報メディアセンターのスーパーコンピュータ、研究所に配置されている計算資源を物理的、システムの統合を進めて学内にアカデミッククラウドを構築する計画を立てている。計算機が配置されている部局の意向を尊重しつつ、ネットワークを高速にかつ安定に稼働させることにより、空間的に離れていても不自由なく利用できる環境の構築が目標である。また、学内向けにバーチャルマシンの集合体を導入し、1台ごとに利用者に貸し出すサービスを展開しているが、今後は研究用のサーバをハウジングするサービスなどを検討する予定である。

3. 教育情報環境

教育情報環境として、端末を設置した講義室だけでなく、国際的にも手軽に利用できる遠隔講義サービス、語学学習を支援するCALLシステム、教材作成を支援するコンテンツ作成サービスなどを展開している。教育用計算機資源は大学内に3種類存在していたが、これを統合していくことで合意した。大学全体の教育情報環境を構築するという視点から、機構が提供する実運用システムだけでなく、情報系の学科、研究科が先進的で研究的な教育関連システムも導入し、全学の教育情報環境を進展させると同時に学生の教育目的に最も適した情報環境の構築を目指している。遠隔講義サービスは、大学の国際化に大きく貢献するものであり、日本にいながら海外の大学の学生と一緒に授業を受けて、学生同士の交流ができるものである。日本人学生の留学の準備や外国人留学生の来日前の教育など、日常的に活用されていくことを期待している。日本人の語学教育や外国人の日本語教育に活用しているのがCALLシステムである。CALLを利用した授業がすでに多く提供されており、授業で利用する教材の作成活動も積極的に展開している。

4. 事務系情報環境

事務の各部署が独自のシステムを維持、管理している現状では、大学内での情報の共有化は実現できない。大学全体としての運営管理システムを考えなければならないが、運営管理にはデータに従ったワ

ークフローがあり、データの共有化はワークフローを変更させる。本来は、本部、部局を統一的に考えて情報システムの設計を行わなければならないが、扱う問題の規模が大きくなりすぎるので、当面は、本部の持っているデータの統合、共有化を第一の目標に設定する。と言っても、この時の基本方針として、本部のシステムは本部だけで利用するのではなく、統合認証システムによる認証を利用して部局でも利用できることとする。これにより事務の負荷が軽減され、事務が本来すべき仕事に専念できるようになり、教員の負担を減らすことにつながっていく。このようにして、全学的にITガバナンスを推進していく。このためには、大学全体の情報の整理、全学データベースの構築と全学メールの事務連絡への活用が優先課題となる。これらに対しては、事務部の協力が必須であるので、協議をしながら進めていきたい。その一環として、現在は、大学が教員の活動を把握するための教員活動DBの構築を進めている。これまでの研究者総覧とは異なり、国の評価に関する資料を、教員活動DBを基に作成することにより、教員の評価に対する負荷を軽減させることが目的の一つである。これは同時に文科省令による大学の基本情報の公開の資料となる。また、部局長や個人が認証によりデータを自由にダウンロードできる機能も備えており、部局のデータベースとしても利用できる構成になっている。このように大学のデータベースは、大学の構成員全体で情報を共有できる基盤である。また、ホームページをホスティングするHPサービス、全学メールサービスなどを展開し、部局が独自に設置しているサーバ類をユーザが気づかないような形でセンターに統合していく方策を検討している。今後ともこのような全学的データベースを設計維持管理していくこと、および部局独自の管理運用系システムを統合していくことが情報環境機構の重要な使命であると認識している。

大学の情報環境は、教育研究活動を活性化するためにはなくてはならないものであり、今後とも構成員すべてにとって利便性が高く安全な情報環境へと発展させていく予定であるので、関係者の方々の積極的なご支援ご鞭撻を期待する次第である。

大学の動き

京都大学東京フォーラムを開催

10月5日(水)、「京都の知～文明の危機と京都学派～」をテーマに、京都大学東京フォーラムをホテルニューオータニにて開催した。出席者は約250名で、学外からは本学卒業生を中心とした国会議員、企業、官公庁の関係者等が多く参加され、学内からは総長、理事・副学長、副理事、部局長等が出席した。

このフォーラムは、本学の個性豊かな研究者がその成果を首都圏にて発信する場として実施しているものである。今回のフォーラムは、3月15日(火)に開催を予定していたが、東日本大震災により順延したもので、危機の時代といわれる現代において、「京都学派」に代表される京都の知の可能性を出席者とともに考える機会とした。

フォーラムは、大西有三理事・副学長による開会挨拶、竹沢泰子理事補(人文科学研究所教授)の司会



講演する佐伯教授



講演する中西教授

により進められた。松本 紘総長の挨拶の後、佐伯啓思人間・環境学研究科教授が「京都学派の今日的意味；「危機の時代」のただ中であって」と題して、また、中西 寛法学研究科教授が「世界との対話－文明的視座からみた“京都学派”」と題して、それぞれ講演を行った。次に、



挨拶する松本総長

浅野耕太総長室副室長(人間・環境学研究科教授)がコーディネーターを務め、佐伯教授、中西教授をパネリストとして、会場から寄せられた質問に回答する形でパネルディスカッションを行った。



パネルディスカッションの様子

フォーラムに続いて開催した懇親会では、阿辻哲次理事補(人間・環境学研究科教授)の司会により進行



懇親会で挨拶する和田氏



懇親会で挨拶する竹本氏

し、松本総長の挨拶の後、和田紀夫日本電信電話株式会社社長、国会議員による京都大学同窓会の事務局長を務められる竹本直一衆議院議員、長尾 真元本学総長(国立国会図書館長)、そして望月晴文元経済産業事務次官から、それぞれ挨拶をいただいた。いずれも各界を代表する

本学の卒業生であり、特に和田氏からは、財界で活躍する有力卒業生が結束して京都大学を支援する“鼎会”(かなえかい)という新たな団体発足について発案をいただき、多くの出席者から賛同が得られた。

今回の東京フォーラムは、首都圏における本学の



懇親会で挨拶する長尾元総長

情報発信という目的に留まらず、出席いただいた各界で活躍される本学関係者の結束を図り、京都大学と、大学に縁のある関係者を繋ぐ契機と



懇親会で挨拶する望月氏

もなった。本学では、このような機会を継続的に提供することで、より一層の情報発信、交流の機会提供に努めていきたいと考えている。



懇親会場の様子



(渉外部)

部局の動き

経営管理大学院が建国大学経営学研究科および同大学商科経済学院と教育学术交流協定を締結

経営管理大学院は、10月19日(水)に韓国の建国大学経営学研究科および同大学商科経済学院と教育学术交流協定を締結した。同協定は、小林潔司院長とKim Woobong建国大学前副学長との間で、日韓両国の観光、芸術、文化などのコンテンツビジネスに関する共同研究の可能性について協議を行った結果、教育と学術面での積極的な交流を図ることが合意され、締結に至ったものである。当大学院では、老舗店の商売が長年継続している背景についての研究を進めている。一方、建国大学は、現代グループやサムスングループとの関係が深く、韓国企業躍進についての研究が進められている。本年6月には小林院長をはじめ4名の教員が建国大学に招へいされ、「創造性と創造性の産業化」をテーマに第1回合同セミナーを開催した。また、2012年6月には京都で第2

回合同セミナーを行う予定である。

本協定の締結を受けて、今後は、コンテンツビジネスにおける共同研究を行い、互いにより充実した教育、研究活動を行うことが期待されている。



協定書を交わす小林院長(左)とKim前副学長

(経営管理大学院)

生存圏研究所赤道大気レーダー10周年記念行事を開催

生存圏研究所は、9月22日(木)・23日(金)にインドネシア共和国ジャカルタにおいて、赤道大気レーダー(Equatorial Atmosphere Radar;EAR)の完成から10周年を記念して、記念式典、祝賀パーティおよび記念国際シンポジウムを開催した。

EARは、平成12年度末に完成した大型大気レーダーであり、インドネシア西スマトラ州の赤道直下に位置している。同種のMUレーダーと比べて最大送信出力が1/10であること以外は、ほぼ同等の性能を持っており、平成17年からは全国・国際共同利用に供されている。

記念式典では、津田敏隆生存圏研究所長による開式の辞の後、バンバン テジャスクマナ インドネシア航空宇宙庁(LAPAN)長官と塩田浩平理事・副学長から、両国の協力により10年間にわたる長期連続観測を実現できたことに対する謝辞と今後の発展を期待する旨の式辞が述べられた。また、来賓として出席されたスハルナ スラプラナタ インドネシア研究技術(RISTEK)大臣、鹿取克章駐インドネシア特命全権大使(島田順二公使による代読)および澤川和宏文部科学省研究振興局学術機関課長から、それぞれ心のこもった祝辞と現在計画中のEAR拡張プロジェクトに対する期待が述べられた。さらに、EARのあるアガム県庁を代表してエルディゼン氏から

祝辞が述べられた後、津田所長とテジャスクマナ長官から同氏に感謝の意を表す記念品が贈呈された。続いて、山本 衛生存圏研究所教授からEARの研究成果が紹介された後、EARのあるミナンカバウ地方の踊りが披露され、閉式となった。式典は国内外から約200名の列席を得、また、マルザン アジズ イスカンダル インドネシア科学技術評価応用庁(BPPT)長官とスリオロ B. ハリジョノ気象気候地球物理庁(BMKG)長官も出席され、インドネシアにおけるEARに対する期待の大きさが窺えた。

引き続き執り行われた祝賀パーティでは、マフディカルタサスミタLAPAN元長官、イアインリード アデレード大学教授、深尾昌一郎本学名誉教授から、EARに対する10年間の思い出とともに祝辞が述べられた。インドネシアらしいアルコール抜きのパーティであったが、終始和やかなものとなった。

その後、2日間にわたって開催された記念国際シンポジウムでは、16件の口頭発表および34件のポスター発表が行われ、これまでの研究成果がレビューされるとともに、最新の研究成果や今後の研究計画について活発な議論がなされた。インドネシア人研究者による発表も多数行われ、これまで当研究所が東南アジア地域の若手研究者の人材養成に多くの努力を払ってきた成果が実りつつあると考えている。



赤道大気レーダー10周年記念式典参加者集合写真



赤道大気レーダー見学者集合写真

(生存圏研究所)

寸言

「人と同じことをしない」

益本 康男

昭和40年、学生運動が本格化する前の時代に工学部へ入学しました。最終的な学歴は工学部精密工学科卒となっていますが、工学部で何かを極めたかったからというよりも、入試で昔から好きだった数学の配点が高かった学部だからという理由で受験を決め、入学したと記憶しています。



40年以上昔を振り返り、まず頭に思い浮かんだのは、祇園^{ほんと}や先斗町のあの独特な雰囲気です。研究室の久保愛三先生(現「京機会」事務局長)に連れて行っていただいた祇園の遊びは、九州生まれで神戸育ちの私にとっては何よりも瑞々しく、楽しいものだったのでしょう。二度目以降、「京大の学生さんは出世払いで」という女将さんの心遣いで、飲食の実費を払うだけで立派な座敷に通してもらえたこともあり、今なお忘れない貴重な経験です。

久保先生には、卒業に際しても本当にお世話になりました。一年留年した私が臨んだ歯車の「歯元応力の解析」というテーマの卒論は、先生がいなければ書き上げることはできなかったでしょう。私にとってはまさに恩人です。

卒業後の進路としては当初、その頃テレビで放送していた青春ドラマと父親の影響から教師を志望していました。しかし父の苦勞をずっと傍でみてきた母親の反対もあって断念。宙ぶらりんな気持ちでキャンパスの採用掲示板を眺めていた時に「まだ(就職先が)決まってないんですか？」と声をかけてくれたのが、久保田鉄工(現クボタ)の採用担当の方でした。高校時代の親友が内定していたこともあり、クボタへの入社を決めました。

入社後は、本社の環境装置部門に配属されまし

た。ちょうど公害が社会問題となっていた時代です。まだ実績に乏しく、黒い煙を出さない焼却炉や産業廃棄物の入ったドラム缶ごと燃やせる炉など難しい注文が舞い込みましたが、解決策を考えることはとても面白く、大きなやりがいを感じました。しかしここでも転機が。人間として許容できなかった当時の上司(課長)と大ゲンカしたのです。「もう嫌だ、辞めてしまおう」と出社拒否を断行した私に「東京へ行って見ないか？」と電話を下さったのは、京大OBの上司(部長)で、私がいた研究室の先生の同級生という方でした。誘いの翌日にはすぐ東京へ。その部長がいなかったら、間違いなく今の私はありません。

東京で1年ほど下水処理のプロジェクトに携わった後は、栃木県宇都宮市の工場で、コンバインをはじめとする農業機械の生産技術担当になりました。ある部品の機械加工を他社が1分で行っていたなら、俺たちは30秒、いや15秒でやるぞ…という具合で常にチャレンジし続けた結果、ロボットを使った生産ラインの世界初導入(当時)も経験しました。

私が今、学生の皆さんに伝えたいのは「人と同じことをしない」ということです。これは事ある毎に会社の役員・従業員にも言っていることです。絶えず人と違うこと、以前と違うことにチャレンジしていると、時に失敗を経験するでしょう。でもその積み重ねがやがて大きな成果や自分自身の成長につながります。こうしたらもっと良くなるはず、面白くなるはず…と常に考え、実行に移す癖を、ぜひ今のうちから身につけて下さい。そうすれば社会人になった時に、色々なアイデアを考え、実行させてくれて、その上給料までくれる会社が、ありがたく、楽しい存在に思えることでしょう。

勉強も大切ですが、よく遊ぶことも大切です。京大はいつの時代も自由闊達な風土がある大学です。遊びを通じて見聞を広め、様々な人と出会うことは、皆さんのチャレンジをより一層楽しいものにしてくれるはずです。

(ますもと やすお 株式会社クボタ代表取締役
会長兼社長 昭和46年工学部卒業)

随想

断想：左と右

名誉教授 左右田 健次

左右田(そうだ)は、約20万ある日本の苗字の中で、最も多い佐藤から数えて5,773番目に当り、約1,700家为名乗られているそうです。私の生家は、愛知県の三河湾最奥に近い土地で造り酒屋を営み、親戚や近隣にも左右田姓は少なくありませんでした。ところが、岡崎市にある岡崎中学(旧制、現・岡崎高校)に入ると、皆から珍しがられて少々驚きました。東京やその近郊には相当数の左右田家があるようで、東京大学理学部化学科の初代生化学教授は左右田篤郎先生であり、硫黄化合物の代謝の研究をされました。たまたま、私も硫黄や類縁のセレンを含むアミノ酸関連の生化学を研究したこともあって、「お血筋は争えませんが」と、時々、この先生の孫と間違われました。篤郎先生の兄上は左右田喜一郎といわれ、一橋大学の前身、東京高商の教授で経済哲学を研究され、また、ご子息、左右田道雄氏は筆名、黒沼 健として推理小説やSF小説の作家、翻訳家として活躍されました。初期の京大出身の英文学者に左右田 實という方がおられて、ディッケンズなどの研究をされたそうですが、ご出身地は知りません。昔、神田付近を歩いて、「左右田」という表札を見た記憶があります。16世紀末、三河を領していた徳川家康が豊臣秀吉から江戸への国替えを命じられた折、優秀な家来を旗本として連れて行き、恐らく非優秀であったわが家の先祖は、選に漏れて田舎で造り酒屋を始めたのかもしれない。

さて、左手と右手は表裏を同じにして重ね合わせる事ができません。昔、読んだ物理学の入門書に宇宙は全て対称性をもつと書いてあったことを思い出します。プラスがあればマイナス、粒子があれば反粒子、左があれば右など。政治の世界でも、フランス革命以来、急進派は左翼、保守派は右翼であり、昔の宮中では左大臣、左大将の下に右大臣、右大将がひかえていました。大工が「のみ」を左手でもつことから、酒飲みを左利き、飲まない人を右利きといっています。化学の世界では、分子に対称面や対称中心がないと、二つの分子の形が左手や右手の関係にな



り、光学異性といえます。たとえば、ヨーグルトなどに含まれる乳酸、 $\text{CH}_3\text{CH}(\text{OH})\text{COOH}$ は、左から2番目の炭素に4種の異なった原子(H)や原子団($\text{CH}_3, \text{OH}, \text{COOH}$)が結合しています。このような炭素は不整(キラル)炭素原子と呼ばれ、分子全体では左手、右手の構造に当り、それぞれL型、D型と呼ばれます。左手を鏡に映せば、右手になることから、これらを鏡像異性体ともいいます。乳酸のOHがアミノ基(NH_2)に変わったアミノ酸の一種アラニンなどでも同様にL型とD型があります。

生物の世界では、原則的に光学異性体の片方だけが存在します。例えばタンパク質を構成する20種類のアミノ酸はすべてL型で、糖はD型である、というのが定説でした。これは現在でも大筋において正しいといえます。この意味では、地球の生物界は対称性を欠いているのです。今から40億年前、生命が誕生した時、恐らくはD型とL型のアミノ酸が混在していた生体成分の原始スープにおいて、選択的にL-アミノ酸だけが結合してタンパク質分子ができたと思われませんが、その選択性の機構は分かっていません。ところが、乳酸を作る乳酸菌の種類によって、L型、D型、さらに両者が等量混ざったラセミ乳酸が存在することが知られ、この例外中の例外の生じる仕組みは謎でした。1936年、京大農学部農芸化学科の片桐英郎先生と北原覚雄先生は、乳酸菌の中にL型やD型の乳酸をラセミ化する酵素を見出されました。世界で最初のラセミ化酵素、乳酸ラセマーゼの発見であり、やっと15年後に米国で第二の例としてアラニンラセマーゼが発見されたのですから、画期的な成果でした。近年、京大原子炉実験所の藤井紀子先生は、タンパク質の中にD-アミノ酸の存在を明らかにされました。これもまた画期的です。

アラニンラセマーゼは見出されたものの、ほとんど不分明であったアミノ酸ラセマーゼに惹かれて、私はこの分野の研究に入りました。幾つかの新しいアミノ酸ラセマーゼを発見し、性質や構造の解明に没頭した若き日々を思い起こします。京大停年後に移った関西大学でもラセマーゼやD-アミノ酸生化学の研究を続けましたから、生涯にわたる研究分野といえます。意識せずとも、学生時代の片桐、北原両先生の影響が現れたのでしょうか。それに「左右田」は「左と右を生じる場」をも意味しますから、私にとって宿命的であったのかも知れません。

(そうだ けんじ 平成8年退職 元化学研究所教授、専門は微生物化学)

洛書

心の健康と体の健康

松田 文彦



11月6日に長浜市で開かれた、「いきいき健康フェスティバル2011」という催しに参加した。「健康づくり0次クラブ」という地元のNPOの主催で、雨にもかかわらず2,000人の参加者を数える盛会であった。「0次」とは耳慣れない

言葉であるが、これは医学研究科が長浜市で進める予防医学研究「ながはま0次予防コホート事業」に由来する。環境や生活習慣の改善、保健指導などを通じた病気の予防を1次予防と呼ぶが、人には個性がありそれぞれに合った健康法があるはずだと誰もが思うのに反して、今までは集団の平均を画一的に当てはめた方法が中心であった。0次予防は、個人の体質、つまり遺伝的素因を考慮に入れて、一人ひとりに最適な病気の予防法を施す「個の医療」を実践しようという先進的な試みを指す造語である。

ながはまコホートは、長浜市の市民一万人の健康状態を20年かけて調査し、病気と遺伝、環境・生活習慣の関連を見いだして市民の健康づくりに役立てようという大事業であるが、その目標達成のために、市民が自ら結成したのが「健康づくり0次クラブ」である。目標の一万人の参加者を昨年得られたのは、こういった市民の熱意とパワーに加えて市役所、医療機関の協力のおかげである。今回の催しは、健康教室、体力測定などに加え、子ども達も楽しめる縫合の練習など、市民自らの企画による全国でもあまり例のないユニークな試みであった。理事長のT氏は、地元で大人気のパン屋を経営されているが、初めてお会いした時の「長浜市を心も体も健康な日本のまちにしたい」との言葉に感服した。氏の理想とする、自分ひとりの健康のみに満足することなく、皆が健康でお互いに思いやりと優しさを持ったまちを作るためには、市民の心が健康であること、すなわち正しい知識に基づいたバランスのとれた健康観をそなえることが不可欠で、そのための啓発活動を

私も微力ながらお手伝いしている。

しかしながら、健康に関連する情報がこれほど世の中にあふれると、自分に耳当たりのよいものだけについつい飛びついてしまうものだ。たとえば最近はやりの「炭水化物ダイエット」。糖質さえ抑えれば、焼き肉を毎日食べても痩せられるそうだ。毎日焼き肉の言葉に飛びつくおとなもどうかと思うが、いかに食生活が欧米化しても、鮭もカレーも食べたい、食欲のないときにはお茶漬けで軽く、と思うのが普通の日本人であろう。友人の糖尿病の権威I教授は、糖尿病の食事療法は極めてむずかしく、無理のある指導は続かないので、結局は多くの食材をバランスよく少なめに食べることに尽きると言う。食は文化であり、いくら病気をしても日本人の食生活に米は欠かせない、というごくあたりまえのことで、偏った健康づくりに頼らず、正しい知識とゆったりした心で病気とつき合うことが最良の方法であることを示す好例であろう。

アルコールは、「酒は百薬の長」の言葉通り、量さえまもれば心血管系の病気に予防効果があり、人間関係を円滑にする、精神的な疲れをとるなど、心の健康に資するところも大きい。だから、何が何でも酒をやめるとだれかれ構わず説教をする医者は少ない。一方、食道がんの発生リスクは少量のアルコールでも増えるから、食道がんにとって飲酒は御法度である。これらの情報を持って自身の健康を考えると、食道がんは稀ながんだが難治性なので酒をやめようとする人と、自分がかかる可能性は低いからやっぱり酒をたのしみたいと考える人がいて当然だ。一人ひとりが自分の生き方や健康観と相談して、いちばん合った落としどころを見つければよい。

健康は本来多様な要素が集まって成立するものであるから、点としてではなく面として捉えるべきである。だから少し離れて眺めると全体像がよくつかめる。心が健康であるためには、この距離のとり方を学ぶことが大切で、それがまた体の健康につながるのではないだろうか。

(まつだ ふみひこ 医学研究科教授、専門はゲノム医学)

話題

東日本大震災関係シンポジウム「大震災後の医療・診療・感染症防止を考える」を開催

医学部附属病院は、東日本大震災関係シンポジウム「大震災後の医療・診療・感染症防止を考える」を9月29日(木)に百周年時計台記念館百周年記念ホールにて開催した。同シンポジウムは、当院および医学研究科が、東日本大震災発生直後より行ってきた被災地等への様々な医療支援活動について、一般の方々に広く報告することを目的として開催したもので、当日は、学内外から120名余りの参加があった。

シンポジウムでは、坂田隆造副病院長より「京



講演する坂田副病院長

都大学における医療支援体制」について講演が行われた後、大鶴 繁救急部助教より「災害派遣医療チーム(DMAT)による支援」について、三上芳喜病理診断部准教授より「検死医としての活動」につ

いて、石井和樹氏(医学部人間健康科学科4年生)



特別講演を行う小池教授

より「東松島におけるボランティア活動から」について、山崎信幸デイ・ケア診療部院内講師より「福島県における『京都府心のケアチーム』の活動」について、濱西潤三産科婦人科助教より「宮城県石巻赤十字病院への産婦人科医師派遣に参加して」について、村中弘之心臓血管外科助教より「近畿ブロック4大学による医療支援」について、高倉俊二感染制御部准教授より「被災地における感染症防止」について一般講演が行われた。引き続き、小池 薫救急部教授より「福島第一原子力発電所の事故を踏まえた今後の緊急被ばく医療」について特別講演が行われた。最後に、坂田副病院長より「今後の被災地への医療支援」について講演が行われた。

(医学部附属病院)

ブータン上院議院ペンジョール議長一行との懇談会を開催

参議院議長の招きで日本を公式訪問していたブータン上院議院ペンジョール議長一行が9月30日(金)に本学を訪問し、赤松明彦理事・副学長ならびに京都大学ブータン友好プログラムのメンバーが歓迎の意を込めて懇談会(世話人：吉川左紀子こころの未来研究センター長)を開催した。

懇談会では、参加者の自己紹介の後、赤松理事からの歓迎の言葉、松沢哲郎友好プログラム世話役代表(霊長類研究所長)によるプログラムの実施経緯に関する説明があった。続いて、中嶋智之経済研究所教授による「Culture and Economic Behavior」、熊谷誠慈次世代研究者育成センター特定助教による「Prospects for Buddhist Studies in Bhutan」、山本真也霊長類研究所特定助教による「Nature in

Bhutan and its Environmental Education」の研究報告を行い、本学とブータンとの今後の交流計画について熱のこもった話し合いが行われた。



懇談会出席者集合写真

(こころの未来研究センター)

森林科学公開講座「森と樹木から世界を観る」を開催

生存圏研究所と農学研究科森林科学専攻の共催により「平成23年度京都大学森林科学公開講座」を10月8日(土)・9日(日)に開催した。この公開講座は、我々にとって森林や樹木がいかに重要であるかを深く理解してもらうことを目的として毎年開催している。

今年度は「森と樹木から世界を観る」と題して、森、樹木、木材、大気、接着剤、そしてひとかけらの木片等の観察から見えてくる多彩で興味深い世界について、宇治キャンパス内の木質ホールにおいて、6人の講師が講演を行い、参加者は熱心に聴講した。

また、2日目の9日には研究の現場を実際に体験するために、「顕微鏡で観る」、「樹木を観る」、「新しいマテリアルを観る」、「立木の材質を観る」という4つのコースに分かれて、見学と実習を行った。

当日は、晴天にも恵まれ、2日間での参加者数は60名に達した。



「樹木を観る」実習風景

(宇治地区事務部)

京都大学シンポジウムシリーズ「大震災後を考える」シリーズ XV「東日本大震災地域事業継続に向けて」を開催

10月15日(土)、京都リサーチパークサイエンスホールにてシンポジウム「東日本大震災地域事業継続に向けて」を開催した。

本シンポジウムは、一般市民の方々を対象にした本学の「大震災後を考える」シリーズの一つとして、経営管理大学院が主体となって実施するもので、地域／事業継続計画、世界からみた日本の復興について情報発信を行うことが目的である。



講演する高村氏

シンポジウムは、小林潔司院長の挨拶にはじまり、前半では「中山間地域の知恵を復興に生かす」(高村義晴元内閣府参事官)、「被災地の復興－国際協力の視点から」(三牧純子国際協力機構企画役)、「アジアから見る日本の地域振興」(光橋尚司アジア開発銀行専門官)と題した基調講演が行われた。

後半は、コーディネーターの若林靖永教授による

進行のもとパネルディスカッションを行った。パネリストとして、本田茂樹株式会社インターリスク総研研究開発部長、石原克治日建設計総合研究所理事、碓井 誠株式会社オピニオン代表取締役に加え、小林院長が参加した。ディスカッションでは、BCP / DCP (Business Continuity Plan / District Continuity Plan) をキーワードとして企業、エネルギー、ロジスティクス、コミュニティーについて活発に議論が交わされた。

当シンポジウムでは、持続可能な地域づくりの成否が震災地域のみならず、中山間地域、ひいては我が国の行く末を暗示する重要なテーマであることを再認識させる重要な機会となった。また、当日は、会場には約100名が参加し、盛会のうちに終了した。



パネルディスカッションの様子

(経営管理大学院)

教育学研究科附属臨床教育実践研究センター公開講座「うつの心理療法：『はかなさ』と『型』の国日本において」を開催

臨床教育実践研究センターでは、毎年、深刻化する教育問題への取り組みの一環として、現代人の心の理解に主眼をおいた公開講座を開催している。

今年度は、センター客員教授のウインスロップ・バー(Winthrop Burr)氏を講師として、10月30日(日)の午後1時から京都テルサ第一会議室にて開催し、心理臨床家や教育関係者、看護師、学生など約90名の参加があった。

講演では、臨床的に問題となるうつ病について概観し、アメリカではどのような治療がなされてきたのか、また、日米の作家がうつ状態の体験をどのように表現しているかなど、講師自身の臨床体験や比較文化的なコンテクストを交えて語られた。さらに指定討論による議論を通して、うつ病に対する様々な治療法の中の一つとして心理療法が有効であることが指摘された。臨床経験豊富な講師の語り口に接した参加者からは、「異文化圏の方の臨床姿勢がストレートに伝わってきたことに感銘を受けた」「文化



ウインスロップ・バー氏による講演の様子

は違って人間としての根本は通じるものがある」「日本人だからできる方法を身につけていきたい」などの感想が寄せられ、貴重な機会となった。

本講座は、例年参加者から大変好評を得ており、来年度以降も現代社会の複雑な心の問題を理解するための視点を一般市民に向けて広く提供できるよう開催していく予定である。

(大学院教育学研究科)

訃報

このたび、^{いわせまさのり}岩瀬正則エネルギー科学研究科教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に同教授の略歴、業績等を紹介します。

岩瀬 正則 教授



岩瀬正則先生は、9月29日逝去された。享年63。

先生は、昭和46年、京都大学工学部冶金学科を卒業後、同48年、同大学大学院工学研究科修士課程(冶金学専攻)を修了、同年4月、京都大学工学部助手として採用された。昭和54年、京都大学工学博士の学位を受けられ、助教授を経て、平成8年2月、教授に昇任された。また、平成8年5月、エネルギー科学研究科が独立研究科として発足すると同時に同研究科教授(工学部物理工学科兼任)として異動された。この間、2006年から2009年までオーストラリア国ニューサウスウェールズ大学に、また、2008年から2009年までカナダ国トロント大学に、いずれも客員教授として招聘されるなど国際的にも活躍された。

先生は、熱力学の基礎学理の材料生産プロセスへの応用に関する研究において優れた先駆的研究業績を残された。特に、他に先駆けてなされたジルコニア固体電解質を用いた酸素センサーの開発、また、豊富な熱力学的知識と洗練された実験手法によりなされたスラグの熱力学的解析は、鉄鋼製錬工学分野の進歩に大きく貢献した。近年は、環境・エネルギー分野へ視野を広げ、廃木材を利用し二酸化炭素を生成せずに金属鉄と水素ガスを生産する方法を開発し、Steel Research International 誌の2006年最高論文賞を受賞された。

また、国際的に著名な研究者を執筆者に集め、現在編集中的“Treatise on Process Metallurgy”と題する専門書の共同主編集者として、熱化学に関する章を編集ならびに執筆中であり、業半ばでの急逝が惜しまれる。

(大学院エネルギー科学研究科)